親としての自己同一性形成に関する一考察
── 子育て，職業を中心に ──

津　村　真希子

Ⅰ　問題と目的

本研究では育児期に焦点を当て，子どもの誕生が家族システムに及ぼす影響および，親としての自己同一性形成に関して職業と家庭の両立がどのような影響を及ぼしているのかを検討することを目的とする。

Erikson の自我同一性とは，自己の単一性・連続性の感覚であり，一定の対象や集団の中における社会的役割の達成，共通の価値観を共有することによって得られる連帯感・安定感に基づいた自己像である。すなわち，職業，性別，民族，宗教などの領域に関して，それぞれ自己を定義し，それらを一つの個として統一的に捉え，将来的な見通しをもつことを言う。ここでは，職業，性別，民族，宗教などのような自己概念の重要な領域の自己像であり，自我同一性の基盤となるものを自己同一性と呼ぶことにする。

自我同一性の確立は青年期の主要な発達課題であるとされる。しかし，Erikson が「自我同一性はその大半が生涯にわたって続く無意識的な発達過程である」と述べているように，それは青年期だけの問題ではなく，新たな社会的役割の受容や，心理的・身体的変化に直面するたびに，再構成されなくてはならない。

Erikson（1973）は，人間の発達を８段階に分け，成人期初期の段階として「親密性」をとりあげ，成人期の発達段階においては「次の世代の確立と指導に対する興味・関心」を表す「generativety」という概念を作った。この人格発達の説明において，Franz, C. E. & White, K. M.（1985）は，「親密性」の発達，「対人関係の愛着」の過程の説明が不十分であることを指摘し，「個性化の経路」と「愛着の経路」の２つの経路の発達モデルを提唱した。それによると，成人期初期の個性化の課題は「仕事とライフスタイルの探索」，愛着の課題は「親密性」であり，成人期の課題はそれぞれ「ライフスタイルの統合」，「世代性」である。つまり，親としての自己同一性は，従来の個人の自我同一性理論の枠組みによる説明だけでは不十分であり，「愛着の経路」の発達における「親密性」「世代性」といった対人関係の愛着も含め統合的に捉えていく必要がある。

第一子の誕生と育児期間は，家族発達の主要な一段階とみなされ，解決すべき発達課題が提示されている。この時期は，家族関係が二者関係から三者関係に変化することによって，家族システムに，親子という新たなサブシステムが誕生し，今まで機能していた家族システムを再調整する必要が生じる。

現在は，個人として様々なライフスタイルの選択が可能になりつつある時期とは言え，いまだ性別役割分業の意識は根強く存在しており，女性は仕事と家庭の両立に葛藤をもつことが考えられる。一方，父親である男性にこの葛藤は体験されることはないのだろうか。本研究では育児期に焦点を当て「仕事と家庭の両立が母親としての自己同一性に及ぼす影響」および「妻の就業の有無が父親としての自己同一性に及ぼす影響」について検討する。

Ⅱ　調査Ⅰ　──結果と考察──

１歳半から２歳の第１子を育てている夫婦を対象とした。調査は，愛知県内の市町の保健センター４カ所と保育園16園に協力を求めた。質問紙は，全部で292世帯に配布した。有効回答数は，夫婦そろって回答を得られた96世帯，192人である。

親としての自己同一性に関する因子として，４因子が抽出された。第Ⅰ因子は「心の支えとしての子ども」，第Ⅱ因子は「子どもの成育に対する満足感」，第Ⅲ因子は「子育ての束縛感」，第Ⅳ因子は「子どもは分身感」と解釈された。

この４因子について性別で t 検定を行ったところ，２因子において夫と妻で有意差が認められた。妻は「子どもの成育に対する満足感」が夫より高い一方で，「子育ての束縛感」も強く感じているというアンビバレントな状況がうかがわれた。これは，妻の職業の有無によって差が見られなかった。つまり，妻はフルタイムで働いていようが，専業主婦であろうが，同じように束縛感を感じながらも，子どもの成育に対する満足感を感じている。これは，子供の世話に関与する時間が夫よりも多いだけ，束縛感も強い一方で，子どもの成育を目の当たりにして満足感も高くなると思われる。

妻の職業の有無の影響は，夫の「子育ての束縛感」に見られた。妻が有職（１日７時間以上仕事に従事している）ほうが，子育てによる束縛感を強く感じていた。

本研究では，親としての自己同一性の因子として「子

育ての束縛感」という否定的な因子も組み込まれている。子育ての束縛感が低く，肯定的に受けとめて，総合的得点の高い人が，親としての自己同一性を確立しているとは一概には言えない。「子育ての束縛感」と「子育ての満足感」「心の支えとしての子ども」，つまり，否定的側面と肯定的側面という育児における相いれない二側面に，うまく対応していくことこそ「親としての自己同一性」の確立といえるのではないだろうか。

Ⅲ　調査Ⅱ　――事例報告――

15名（4組の夫婦，夫2人，妻5人で，合計11家庭）を対象とし半構造的面接を行った。ここでは，仕事と家庭の両立について妻が葛藤を持っている1夫婦を報告する。

事例2W　妻　29歳　女　常勤　核家族　2歳0ヶ月（女児）

とにかくもう日々追われてる生活なんですよ。本当はやっぱり，私が家にいて，ゆっくりして，夫が帰ってくるのを待ち受けて，和ませて，ほっとできるような場所にきっと私が辞めたら変わるだろうなって思うんですけど。これだけ家庭を顧みていないのに，仕事の方でも十分にやり切れていないという感じが自分の中でずっと残っていて，どれも中途半端…。そうまでして，私が仕事を続けさせてもらう意味があるのかなって思うんですね。

事例2H　夫　39歳　男　核家族　2歳0ヶ月（女児）

夫も妻も責任ある立場で仕事をして，なおかつ子どもを育てていくっていうことに関しては，世の中ではまだまだ少ないなと思ってて，だからこそ，確信も持ってるのかなと思いますけど。僕はもっと彼女に仕事して欲しいから，自分の方が子育ての方を小学校入学くらいまでは負担していくほうになるんじゃないかな。子どもを夫婦めいっぱい働くなかで育てたいという気持ちは，むしろ，強くなってますね。

事例2では，夫は，共働きで育児をしていくことに対して確信を持っており，仕事において子育ての制約感を感じながらも，妻の職業への理解を示しており，夫婦がお互いに個として確立した中で育児をしたいという思いが語られ，両立についての葛藤は感じられなかった。一方，妻は，母親としての自己と，職業をもつ自己との間に葛藤があり，仕事も家庭もどちらも中途半端であることに対する自己不全感が語られた。しかし，妻や母親としての自己同一性だけでは，統合的な個の確立としての自我同一性の基盤にはなり得ないことが，育児休業中の体験から語られた。女性にとっては，社会の一員であることと母であることが，一直線上にあるのではなく，分離しているように思われる。

Ⅳ　全体的考察

仕事を持つ女性には，職業と家庭の両立で葛藤が見られたが，親としての自己同一性得点には，仕事をもつ女性と専業主婦の女性の間に有意な差は認められなかった。つまり，職業と家庭の両立における葛藤は「母親としての自己同一性」に否定的な影響を与えるものではなく，結婚，出産にいたる過程で培ってきた「職業同一性」と「母親としての自己同一性」とを如何にして自我同一性に調和的に統合していくか，という問題と考えられる。

また，専業主婦の女性においては，その7割の人が主体的に家庭にはいることを望んでおり，自我同一性の基盤を家庭内においていたが，その反面，将来的には仕事をもちたいと考えている人が8割に達し，家庭外への志向性が見られた。このことは，自我同一性の揺るぎない基盤として，家庭内の役割が十分条件として認識されにくいことを示している。

一方，男性においては，妻の職業の有無によって「子育ての束縛感」に差が認められた。つまり，妻の就業によって，夫の子育てについての束縛感は強まる。これは，妻の就業によって伝統的な性役割分業が行えないため，夫の育児・家事への比重が大きくなることによって生じると考えられる。夫には，子どもや家族ともっと関わりたいという欲求はあるものの，そうする時間的余裕がないこと，また男性が，育児・家事のため，仕事を休むには職場での抵抗感が強いことがうかがわれた。

子育てによる束縛感を弱め，子どもの成育に対する満足感を高める要因として，育児の役割分担の満足度があった。安定した親としての自己同一性を確立するには，個人の内面的変化だけではなく，家族関係，特に夫婦関係の調整が重要な鍵になっていると言える。